



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	翻刻『万代大雑書古今大成』（八）
Author(s)	伊藤, 孝行
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 71, 1(右)-22
Issue Date	2018-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68797
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC71_10Ito.pdf



《翻刻》

翻刻『万代大雑書古今大成』（八）

伊藤孝行

《要旨》

本稿では、『万代大雑書古今大成』（読み…ばんだいおおざっしょこんたいせい）の書誌および翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が刊行された。内容は、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤（二〇一七）*に続き、「な八」より「う三」まで掲げる。

キーワード…近代語、翻刻、万代大雑書古今大成

《SUMMARY》

Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei Reprinting: “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” (8)

Takayuki Iro

This paper presents a part of the book entitled “Bandai Ozassyo Kokon Taisei”, which was first issued in the Tenpo Period (1837-1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although “Bandai Ozassyo Kokon Taisei” is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author’s knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here. This paper reprints the Chapters Na-8 - to U-3 in Ito (2017).

KEYWORD: Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei

【凡例】

- ・漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・割注は【 】で示した。割注中の改行箇所は／で示した。

な 八 男女度橋のうらなひ

五性の生れ年生れ月によりて小児のあるなし吉凶を考る

也夫世を過すを橋をわたるにたとへたり尤吉凶ハ各の徳行

にあれバ吉といへ共不徳なれバ凶と変じ凶といへ共慎ミテ徳行を

おこなへバ吉事となるべし然ハあれど人々の行ひのミにもあらず

幸不幸ハ天命にあれバしらずんバあるべからず其故ハ顔面が不幸

にましますも盗跖の富たるもミナ天命なるをもつて察べし

男	一橋	二橋	三橋	四橋	五橋	六橋	七橋	八橋	九橋	十橋	十一橋	十二橋
金性	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
木性	七	八	九	十	十一	十二	正	二	三	四	五	六
水性	十	十一	十二	正	二	三	四	五	六	七	八	九
火性	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
土性	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	正	二	三
女												
金性	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	正	二	三
木性	十	十一	十二	正	二	三	四	五	六	七	八	九
水性	七	八	九	十	十一	十二	正	二	三	四	五	六
火性	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
土性	七	八	九	十	十一	十二	正	二	三	四	五	六

一橋

子三人あるべしひとりハふじの
死をいたすべし二人ハむひやう也
せいちやうしてはんじやうすべし
そのうち一人ハしゆつけす

れバ死のなんをのがるべし

ゑんへんハ男女ともによし三人の内ひとりハたこく
するかゑんとほしとしるべししゆつけになすとも
ひとりハ何ぶんたびをしていとなむうまれ性なり
しかるときハ三人ともにあんかうにしてさかゆべし
二橋

子六人ありいかにもはん
じやうしてうんつよし

然ども六人ともところを
へだて、すまひするなり

その内ひとりぢやどくの

なんあるひハとりけだものゝためにがいあるべし
つねにいましめつゝしむべしもしさなくバイとけ
なきときむしけのわづらひあるべしおとこをんな
ともにすべてわざハひをつゝしむべし

三橋

男子女子ともにわざ

ハひへてたゝるべし然れ共

よくくつゝしミ徳をおさめバ

二三人の子をもつべきなり

もしふしんくゝなるときハみなたゝりであるひは
やまひのわざハひおなしたゝむびやうにしてうんつよく
しあハせよき子ハひとりなるべしよくくゝ心をつけて
ぜんぎやうをおこなへばミなくゝ無事なるべし

四橋

此かんハよき出家の子を

もつべししゆつけにて

なくバ名たかき芸能へて

世にしらるゝ子也又ハ下人

なりともぶんげんに応じて人にほめらるゝ子なるべし

すべて父子兄弟の中よくわかうしてふつきはん

じやうにしてなにゝつけてもふそくなくして

よろづ心の内々にはつだつすべし

五橋

このところにあたる生ハひと

り子にしてとりかへなきに中年

又よろしをするか又一一人産る事

なりもししからずんバ大悪

か大吉かつ孫にとへたるへんくわあるべしらうごハ

いしよくみちたれり二人ともにこうかうつねに神

ほとけにつかへてしんくゝおこたらずしていのちながし

うまれつきすぐれてさようなるべし

六橋

このところのあたりハ子の縁
なく一人ミともちがたかるべし

もしうまるゝ子ありといへ

どもあくきのたゝりありて

なやます事多かるべしつねにちゝはゝにつかへかうゝ

よしよくゝうやまハ子もうまれ無事にぞだちて

よしまたかミほとけをふかくしんぐゝしてちかひて

ようしをしてもよかるべし

七橋

この処にあたるハ吉也出家か

又げいじゆつひいでたる人かよき

子をもつべし生仏郎とて

あるひハかうをたきほとけを

ねんじてよしすべてくわはらく多しんぐゝするうちにす

おのづからたのしみありされどもふ仁なればわが子に

つきてなげきかなしむことありそのしるしにむねか又

両びんのあたりにほくろあるべし

八橋

このあたりの人の子ハとん

せいこのゝろざしありてしん

ざんなどに入住すべし世を

はなるゝがゆへそんなく徳も

なしあるひハふうがをこのミて名たかき人となる子をもつ

べしその身ハふつきをもとむるこゝろざし多かる

べししんぐゝふかければさいわひあるしやうなりその

しるしにハミゝのほとりにほくろあるべし

九橋

此橋にあたる人の子ハきじんの

たゝり有べし父母をおもんじ

孝行ならバふたりの子ある

べしそのうちひとりの

子ハわざハひ多しひとりハむひやうにしていのち長

くさいはひあるべしかミほとけをしんぐゝして

かうゝをつくしおこなひをたゞしくせバ二人

とも子ハわざハひなくぞだちさかゆべし

十橋

此橋にあたる人ハひとりの

子を先だつる運也故実子

死して養子をしてうん

つよくしあハせよかるべし

実子あれども外の子にあとをつがすれバおひに

いたる迄ふうきありてわづらハしきことなしすべて

このたぐひは父母とまゝ子のうまれしやうとを

もつてきつきやうをかんがへ見るべし

十一橋

此うんあたる人ハうまる子
のうん松の木のさかふる如し
がくしやか又ハふくじんか

大に名高き人となるべし

なにごんぞくをぬきんで、栄名あるべしもし

俗人にても衆にこへて福者となるなりこのうまれ

ハつねハ善事をおこなひ仁しんあつくその身

てんがにしらるゝ程の名をほどこすべし

十二橋

此橋にあたる人ハ子のいのち

ながしふくとくハ九分めなるべし

つねハかう第一とし

善行をおこたらず勤るときハ

たつときくらゐにのぼる子あるべしあるひハめい君

につかへて其身の忠勤もあらハれ子にふしやうの生

つきなし二三度あやうき事あるべししかし忠孝

をはげまバ其わざハひものがれめでたかるべし

な九 名頭つくし【おとこの／ぶん】

木性 茂 文 八 弥

兵 半 権 門 虎 万

卯 明 武 馬 百 満

唯	芳	火	久	寅	五	実	土	理	恒	十	金	和	乙	要	水	甚	次	松	巳	女	木	百
福	梅	性	九	幾	源	計	性	利	六	仲	性	嘉	又	運	性	莊	七	熊	初	の	性	梅
平	包	覚	吉	佐	亀	形	忠	仁	貞	林	与	宇	恒	遠	新	三	市	浅	烝	房	武	
勘	房	義	彦	磯	元	広	藤	治	猪	竹	一	友	賀	右	善	勝	子	正	光	邦	包	
奎	邦	角	加	定	菊	近	太	伝	丑	多	伊	安	好	為	清	四	政	真	宮	滿	芳	
弁	麻	助	岩	金	胸	呉	重	長	当	牛	毘	能	由	恵	宗	作	常	辰	岩	米	米	

伴品茂万沢林	蘭点栗道頼類	火性花吉菊久	庫岩虎薫国曲	幾為艶塩吟越	猶益蘭龜梶玉	高源極今	土性童中竹嶋	蝶政皆伝長徳	藤滝磯磐近楽	金性由幸恒好	熊安虎市峯縫	豊民富茅門糸	末演愛里遠為	水性琴崎晴秋	種霜松子常石	岩政光善哥勝	法体の分	浄念・道意・常味	宗清・正淳・宗順	元俊・宗休・春庵	養庵・玄陸・旦流	立卜・快真・真常
--------	--------	--------	--------	--------	--------	------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	------	----------	----------	----------	----------	----------

休可久栄旧信	常有心夕祐益	自笑自得似雲	弓園潭空誓看	覚夢・締園・西心	宗智・恵休・宗全	道甫・浄慶・宗説	宗甫・旃冊・宗有	尼の分	妙春・栄寿・妙毘	妙園・智貞・寿貞	妙寿・清心・真月	智弓・貞林・妙全	智月・妙巖・清寿	清薫・妙意・妙閑	妙元・秋月・智順	妙順・春月・妙林	貞春・妙三・教意	恵妙・智春・弓心	栄薫・清林・貞正	な十
--------	--------	--------	--------	----------	----------	----------	----------	-----	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----

難産する年月の事

十三才 十九才 二十五才 三十一才 三十七才

四十三才 四十九才

右のとしの女正月七月に産月あたれバ難産す

十四才 二十才 二十六才 三十二才 三十八才

四十三才

右のとしの女二月八月に産月あたれバ難産す

十五才 二十一才 二十七才 三十三才 三十九才

四十五才

右のとしの女三月九月に産月あたれバ難産す

十六才 二十二才 二十八才 三十四才 四十才

四十六才

右のとしの女四月十月に産月あたれバ難産す

十七才 二十三才 二十九才 三十五才 四十一才

四十五才

右のとしの女五月十一月に産月あたれバ難産す

十八才 二十四才 三十才 三十六才 四十二才

四十八才

右のとしの女六月十二月に産月あたれバ難産す

如此ハあれ共懐胎十月の間身持と養生によつて産も安かる

べし

ら一 雷除頌文

東方 阿伽多

南方 刹帝魯

西方 須陀光

北方 蘇陀摩尼

右ハ雷王の御名也これを書つ

けて居所の四方に張おくべし

尤此文を唱ふればさいなんなし

ら二 落馬したときの法

落馬してまるしむねあしく或ハ唾に血交り出る

時ハ藕の粉を酒にて用ゆべし又蓮の葉を細末にして

酒にて吞てもよしまた腰か足にてもつよく打其所より

血にじみてむらさきに斑たるところあらバ早速

外科をたのミて出血すべしさすれば後のうれひ

なし其上導引すべし

○馬の汗ハ大毒也食物又ハ目などへ入れぬやうにすべし

む一 馬の性善悪

青葦毛

火性の人によし

土性の人にあらず

栗毛 雲雀毛

火性の人土性の人にハよし

金性の人にわろし

鹿毛 猿毛

土性の人金性の人にハよし

水性の人にハわろし

雲雀毛

金性水性の人にハよし

木性の人にハわろし

黒毛

水性木性の人にハよし

火性の人にハわろし

む二 上棟吉日の事

甲【ね／むま／さる】乙【う／とり／ゐ】庚【ねむ

ま／たついぬ】辛【うし／ゐ】

壬【さる】癸【うし／とら／ゐ】

まづ其日を定めゑらミ立合すべし神外大吉日なり左の通

正月ハ子の日なり余ハ准じてしるべし

【神／外】正【ね】二【うし】三【とら】四【う】五【た

つ】六【ミ】七【むま】八【ひつじ】九【さる】十【とり】

十一【いぬ】十二【ゐ】

擬三本の御幣をはさむに中の御幣を六寸高くして

南の柱を打しとき其後御幣を三度振てつちを打初

むるなり槌うつとき唱る文に曰

一の槌にて寿命

二の槌にて長遠

三の槌にて福德自在

如此うちとめ其後中の御幣を打て正座へ直し拝して

しりぞく也又文に曰

ヲンコロコロセンダリマトウギソワカ

此文を三返となへて立べし

む三 むくひ日の事

正【七日】二【十四日】三【二十一日】四【八日】五【十六

日】六【二十四日】

七【九日】八【十八日】九【二十七日】十【十日】十一【二十

日】十二【三十日】

又

其月の節に入日より七日間とも云

又

正【とら】二【ひつじ】三【さる】四【ゐ】五【う】六【むま】

七【とら】八【ね】九【たつ】十【ひつじ】十一【いぬ】

十二【とり】

う一 【生れ年六十／甲子吉凶定例】

○きのえねのとしに生る、

人ハ家の上のみつミ人と成

がくもんをこのミてかならず

上達すうまれつきさハがし

けれども少年のころハ父母

につかへてかうくも也兄弟のした
しミふかし男ハ我よりまさる
妻をもち御名ハさうめいの夫を
もとむ万よし

○きのとのうしにうまるゝ人ハ
心きよく風月をあいしがくもん
をこのむようしやうのときハ
じやうしんなるべし親に孝
行にして夫婦むつまじく

いとなミゆだんなくゆたかなる
べし子ハ女子なるべし但
せいきうなるうまれつき也
つゝしミてよし

○ひのえとらのとしに生
るゝ人ハ心さだまりがたく物
事とげがたしもとより弁
舌さハやかにして才覚ふかし
奉公してよし四民ともに
貴人にあいらるゝやう也

御名ハこゝろしづかにして才智
ふかく子あまたあるべし
○ひのとのうにうまるゝ人ハ
せいさハがしきやう也しかし

さいちありてものこと早く
らちのあく性也ゆへにいらぬ
せハもよくして人の為となる
人なり御名ハしづかなる事
をこのミ一しやうゆうふく成
うまれなり

○つちのえたつにうまるゝ人ハ
心かろく衆生縁ありゆへに
貴人にちかづき仕合よし

女人ハおんくハにしてちゑ
をかくし人よりのよきしやう也

○つちのとのミにうまるゝ人ハ
天性忠孝のこゝろざしふかく
しりからによくつとむる性也
夫婦むつまじくでんばたに縁
ありよろづこゝろのまゝにて
いしよくとほしからずいかにも
かしこきうまれつきなり子ハ
ゑんうすかるべし

○かのえむまにうまるゝ人ハ
べんぜつよくこゝろすなを
にしてミやづかへに利あり
貴人にちかづき衣食ゆた

かなり妻ハりはつにして
かしこく女ハよきおつとに
ゑんありて嫁してかならず
賢なる子をまうくべし

○かのとのひつじにうまるゝ人ハ
心ゆるやかにしてしかも大
丈夫なりようしやうのとき
ミなし子となりるらうすれ
ども年よるほどしあわせ
よし夫婦むつまじく

子多ししかれども惣
りやうの子ハそたちがたし
をんなハ身もちたゞしう
してよくいゑをおさむ

○ミづのえさるのうまれの
人ハひとゝなりものにたくミ
にして物事大事の場に
いたりて少もとうぜず変
にりうずこゝろさとして
ふうりうをこのむゆへに
名をあぐるこゝろあり賢
徳あるさいしをうるなり
女ハみめかたちうるハしく

しかもみさほたゞしきう
まれつきなり

○ミづのとりにうまる
人ハ心正直にしてものをか
くす事あたはずゆへに人に
きらハるゝ事もあれどい
しよくあまりあり万心に
かなひ親るいむつまじく
としよりて仕合よし

女ハ家をおこし業をたす
くる貞女なるべし

○きのえいぬにうまるゝ人ハ
べんぜつよく身ハしづかに
して心しつかならずせい
ありて名を人にしらる
いしよくにとほしからず
女ハかんしやくもちにして
気みじかくきれいずき也
よろづ心のまゝなる生れ
なれども子なし

○きのとのゐにうまるゝ
人ハ一生ぶじなり父母の
ゑんうすくはやくはなるゝ

ことありずいぶんかうくになつ
つかふべし夫婦むつまじ

く子ハ三四人あるべし女子ハ
たゝりびやうしんなるべし

中年より仕合よくなる性也

父母にかうくつくすべし中
年よりの仕合ハ父母ハしらず

おハリ給へばなり

○ひのえねにうまるゝ人ハ

性得大たんにしてつねにもの

いはずたまゝいふときハべん

ぜつあきらかなるべししかも学

もんの道ハとげかたし中年より

のち大に仕合よし女人ハ

産むつかし男女ともつねに

庚申かうじんをまつるべし

さいなんをのがるゝといへり

○ひのとのうしにうまるゝ

人ハ少しものねたミの心へてお

もふ事とげがたし忠孝もつ

はうにして信心あらバ貴人と

まじハリけんぞくもおほく

はんじやうすべししかれども

しんぞくのゑんうすく他所

他国へかせぎに出べし女子ハ

よきおつとをもち夫婦

むつまじくいしよくとほし

からずいのちながし

○つちのへとらのうまれハ家

を出て他国へゆきて出世せん事

をのぞむしやう也心たけく

氣つよくしてことにのぞんで

仕ぞんずることおほし慎べし

足のうらにほくろある人ハ

大に立身してせんぞまで

名をあらハすべし女人ハ

はつめいなるうまれなるべ

ししかしミもちかたく

まもらざればわざハひ

ありてうきななたつ事

あるべしつゝしむべし

○つちのとのうにうまるゝ

人ハいしよくとほしからず人に

うやまはるゝ也しかれども親

族のゑんうすし妻ハ我より

としたけたる女よし女人は

たのもしき夫をもちてくハ
ほうあり此人せつしやうを

このミものにたいくつする性也
くわんおんをしんぐゝして
わざハひをまねかるべし

○かのえたつにうまるゝ人ハ
ミやうりをこのミ仕官俸禄の
のぞミたへずいんよくさかん
にして思ひごとたゆるまなし女難
によつてけんぞくわがうせ
ず女人ハつゞまゆかなる生れ
つきなれどもくらう多き
うまれつきなり

○かのとのミにうまるゝ人
ハはかりこと多くこんきつよく
がうぎなる性にていしよくも
とほしからず貴人のひきたて
ありてさいハひを得ること有
べし女ハとしたくるほど
才智あきらかになりし
づかなるうまれつき也
○ミづのえむまにうまるゝ
人ハこんきつよく物事よく

つとめつゞまやうなる性也
しかれどもとかく父母の

心になはずわかきときは
とほし年よりてうんを

ひらきあいくわなるべし
女ハしあハせよきうまれ
しやうなり

○ミづのとひつじにうまるゝ
人ハ心ハすぐなれども口先
かしこくものをうけあひて
ゆうべんをおこなふこと
をこのむ此人をすくふに
功なく義なしおのれが
ぜひをかんがへて利の為にす
ゆへにいしよくにとみたれり
しかし妻の縁うすく子ハ
けつしてなしまことを専とし
神仏を信じ正しきおこな
ひあらバスへはんじやうし
子孫ぞうぞくすべし
○きのへさるにうまるゝ人ハ
うまれつきすなほにして
いしよくとほしからずものやハ

らかにしてにんくハあり
若きときハ病身にして

思ひ事たへねども年寄て
はんじやうすべしふう婦
むつまじく女子多くもつ
女人ハたゞしきみさほある
うまれじやうなり

○きのとのとりにうまるゝ
人ハ心ばへすなほにしてべん
ぜつよくこゝろざしたかし
いしよくふそくなくきやう
だいゑんうすししんるいの
ちからをからずじぶんと
しいだすべしふう婦むつ
まじくともゑんかハるべし
じやけんのうまりつきな
らばしあわせ大にわろし
ずいぶんしやうじきにして
身をたゞしくもたばしあハせ
よかるべし

○ひのえいぬのとしにう
まるゝ人ハわかきときハなに
ごともよろしからざれ共

こゝろばへしやうしきにして
いとなミをだいじにかせ

がバ中年より次第に
はんしやうすべし此人ばつし
にうまれてもそうりやうの
くりあるしやうなりさる
ゆへにたけへやうしにゆきて

そのいゑを大きにちうこ
うしてはんじやうさせ人
にうやまハるべし女人は
かんしやくありてめをと
いさかひたへざるべし

○ひのとのゐにうまるゝ人ハ
こきやうをさりて他国にて
身をたつべしすへハはんしやう也
しかし一たん思ひ付たる事後へ
かへしがたき性ゆへ事をよくと
ぐるといへども又仕ぞんしをおし
とをすうれひありつゝしむべし
夫婦むつまじけれどくぜつたへず
○つちのえねにうまるゝ人ハ
思ひがけなきさいはいを得て
出世する事有しかしミもち

たゞしうらざれば其さいはいたゆ
べしいしやがくしやしゆつけと

ならばはつたつすべし女人

ハ手にげいのうあるべし思

ハぬしゆつせもでき貴人の

てうあいをもかうふるべし

○つちのとのうとにうまるゝ人ハ

さいのうありてべんぜつよく仕

合もよししかし人の事に付いろく

せりくらのたへぬ性也たゞし

それゆへミやうがハよく年寄て

人にうやまハはんしやうすべし

○かのえとらにうまるゝ人ハ

一生心せハしく事多き性也

それにつきて又よき事も

すべしつねにひまなししかれ共

うまれつきたくましくものに

くつせず大りやうなる故たとへ

間違へても時々のぞミさば

きてとをる也女人ハ老て仕合よし

○かのとのうにうまるゝ人ハ

氣じやう高く衣食とぼし

からず貴人とまじハリてさ

いハひをうる事おほし

たゞし人にねたまるゝこと

あるべしつゝしミてよし

ゆへにうハベハゆうに見えて

心のうち甚ハいそがしき性也

しんぞくむつまじくふう婦

中よし女人ハしづかなるう

まれなれば仕合よし

○ミづのえたつにうまるゝ

人ハ若きときハくらう多く

ぢうしよさだまりがたし

年よりてうんひらけ次第に

よし子あまたあり中に大に

出世する子ありておひの

仕合大きによし

ミつのとのミにうまるゝ

人ハ天性りはつにしてさい芸

まつたくとゝのへばよろしく衣

食とぼしあきうど成て

ハ仕合わろしいしや学者

しゆつけとならば仕合よし

貴人にちかづきてよし

とかく同輩以下にはいミ

きらハるゝ性なればなり

女ハ正しけれども少かたまし

くいぢのつよきやう也

○きのえむまにうまるゝ人ハ

心正直にして人の為によく

ほねをおしまず世話をなし

人をたすくゆへにおもハぬ

貴人にあいせられ仕合よし

女人ハはやくおつとにはな

るゝこと有べしんぐしてよし

○きのとのひつじにうまるゝ人

ハ若きときハことのほかけん

やくをまもり正直なり万

心のごとくならざれども

中年已後仕合よくはん

じやうすべし兄弟和合

しふう婦むつまじく

子あまたあるべし

○ひのえさるにうまるゝ人ハ衣食

とほしからず商人となりてよし

田畠ゑんありはじめハまづし

けれどもおひてはんじやう

すべし女人ハ思ハぬゑんあり

て仕合し子あまたあり

ていのちながし

○ひのとのとりにうまるゝ

人ハふうがのこゝろありて人

性よくかなふ貴人に愛せられ

仕合よししかしとりしまらぬ

ところありてやくそくのたが

ふ事ありまたしきじやう

ふかく女なんをつゝしむべし

○つちのえいぬにうまる人は

人のために身をおします心

すなほにして人にあひせらる

若年のときはやく

うんひらくべしわかきとき

ふうんならバ子孫にいたり

大にはつすること有べし

女人中うんにて衣食たれり

○つちのとのゐにうまるゝ人ハ

おや兄弟のちかうをたのまず

我一分にていゑをたもち又

ハ家をおこすべし子ハ惣領

さうぞくしがたしとしより

ての子ハよし夫婦むつましく

すべし中あしけれバ貧なるべし

○かのえねにうまるゝ人ハ衣

食とほしからずとみさかへて

いのちながし妻も心きよく身持

たゞしき故いしよくとゝのひ

子をよくさとるしかし子

ハ病身なるべし

○かのとのうしにうまるゝ人ハ

少しおくびやうにてもものに

おくるゝゆへそんおほし運ハ

高運にていしよくふそくなし

氣をつよくもちてよく諸

事けつだんなきゆへにさだまり

たることなしよつて人にかろ

しめらるゝことも有べし

しんぐゝして心をけつすべし

○ミづのえとらのうまれハ若

きあいだハ旅たこくをうけ

まハリしんろうおほく子も

おそくいでゝべしおそきハ

よしはやきハ病身なり

晩年ハゆたかなるしやうに

ていしよくたるべし女人ハもの

をあハれむしやうなりゆへ
にゆくすへよかるべし

○ミづのとのうのうまれハ

一生食欲かつ性にて酒食ミち

たるべし貴人につかへ他国へかけ

まハるべし万事大ていじやうじや

すべし人のいさめをもちひず

ゆへにそんも多し人のいさめ

にしたがひてよし

○きのえたつにうまるゝ人ハ

こんきつよくつねにものごと

おほやけにして正直なる故

諸人にうやまハるゝ也いしよく

ゆたかにして心のどかなり

若年ハくらう多し

としよりて仕合よし

○きのとのミにうまるゝ人ハ

つねにりつばなることをこのミ

氣しやうつよし人をすくふに功

なく少しおしむ氣ありて人に

益少しゆへに子そだちがたし衣

食ハたるしやう也女人ハ仕合よし

○ひのへむまにうまるゝ人ハ若

き内ハ住所さだまりがたし
げいだうをもつて身をやし
なひ中年より売買にて

利を得べしいろ／＼業をかへ
て老てのち田禄定まる性也

女ハかたつきおそかるべし俗に
ひのえむまをきらへどけつして
たゝると云ことなし

○ひのとひつじにうまるゝ人ハ
半吉のしやう也ふでの道を

もつて世をわたれば大に吉
しんぞくのゑんうすく子ハ

おそくいでくべし子ハたのミ
にならず親ぞくの跡とつがす
べしいしやじやしやなどに
なりてよし

○つちのえさるにうまるゝ人
ハ氣みじかく物をうちこほ
すがごとしいしよくハたり満
てもおのれがこゝろに不足
するしやうなりつゝしむ
べし貴人にハちかづき
がたし只たんきをたしなミ

身をまもらば老て仕合来るべし
○つちのととりにうまるゝ人ハ
いしよくみちたるべし親族の
ゑんうすし夫婦はむつましく
子あまたあるべし人とあらそふ
べからずあらそへばぜひ身を
そこなひあやまつべし

人和ハ有てしゆじやう縁
ふかし他国へ出べからず

○かのえいぬにうまるゝ人は
宮仕子してよしりつしんしゆつ
せ心のまゝなるべし若き間ハ
五ヶ年の間くるしミあり
此時しんぼう大事也かな
らずたんりよいいだすへからず
女人ハよき子をもちて行すへ
さかゆべし

○かのとのゐにうまるゝ人は
若きときハ万事一ツもならず
衣食ともに乏ししかるに
中年よりまことに目に見え
ぬほどづゝ運ひらけ年寄
て大に仕合すべしゆへに

若年の間養生してちやう

めいをいのるべし

○ミづのえねにうまるゝ人ハ

若年の間によき妻に縁有

てともにかせぎいだして大に

しゆつせすべし親兄弟の

ちからをかるべからず子二人ミナ

はつだつすべし老てくハほうのくる

しやうなれば若き間に福分を

とりこすべからず

○ミづのとうしにうまるゝ人ハ

ものごと少し念入過てらちあき

がたし父母のゑんうすく一族の

助力にて人となるべし夫婦

ハむつまじくとしたけ

て子あまたあるべし女人

ハ手きゝなるべし

○きのえとらにうまるゝ人ハ

貴人に近づくかほうこうして

りつしんすべしいしよくとほし

からず父母にはやくはなるゝ

こと有べし大切に孝をつく

すべし又ハ養子にゆきて

おもハぬ家督をつぐことも

あるべし女人ハ大福者の

夫をもちて仕合よし

○ひのえたつにうまるゝ人は

人とまじハリてむつまじき故

四方より友あつまり能事

をも世話をうけてぞんじ

よらぬ仕合すべし心をひろく

持ほどよし奸佞にして気せ

バけれバるらうすべし

○ひのとのミにあたる人は

かたちうるハしくゆへに女人に

あいせらるゝゆへ思ハぬ女難も

いでくる事有べし身を慎

バ貴人に愛せられ仕合を蒙

べし女人ハいしよくゆた

かにしていのちながし子ハ

そだちがたく養子すべし

○つちのえむまにうまるゝ人ハ

心たのもしく人のなんぎを

身に引うけてたすくる性なり

ゆへにざいほうたもちがたし

しかる故よく金銀もあつ

まり出る事も多し福者と云
べし銀持とハなられず万一銀
をためる心にならバかへつて
貧をまねくべし

○つちのとのひつじにうまる人
ハ物事くらう過てそんしつ
あるべしいしよくふそくなく
ゆたかなるべきにたゞ心にむさ
ほりたれりとせず慎むべし
しかし君につかへて忠をつくす
人にて老ては天のめぐミ
深かるべし

○かのえさるにうまる、人ハ望
事あまり大き過てなる事
おそしゆへに若年ハくらう
多しはやく妻をまふけ身
をおさむべしかぎりある命を
以てかぎりなき望を立るハ天
のにくミをうくべしつゝしミ
てはやく身をおさめてよし
○かのとりにうまる、人ハ
たましゐさハやうにべんぜつ
よく人和ありていしよくた

れりふう婦むつまじく兄
弟仲よく何事もふそくなし
しかれども子多くあれど
そだちがたし神仏をいのり
て子をだいじにそだつべし
女人はよきおつとに縁有
てよき子をまふけゆくすへ
さかゆべし

○ミづのえいぬにうまる、人ハ
東西にかけめぐりくらうす
べししかれどもいしよくハ乏
しからず貴人に近づきて
十分のゑいぐわもすべし心ハ
ひろく物におどろかずゆへに
さんざいもし又望ミもとげ
て財をまふくる事もある
べしはやく妻をもちて
身をおさむべし
○ミづのとゐにうまる、人ハ
氣をつよくして親族兄弟の
力をからず又人にしたがはず心の
まゝに身を立べし一生いしよく
心のまゝなる性也しかし人に

よくまるゝこと有て思ハぬさい

なん有べしつゝしミてよし

女ハよくいゑをたち貞心

にてしづかなるうまれつき也

う二 生れ年四季によりて吉凶の事

子午のとしの人なつふゆのうまれハよしはるあ

きのうまれハわろし丑戌のとしの人なつふゆの生れハ

わろしはるあきのうまれハよし辰申のとしの人

はるあきの生れハよしなつふゆのうまれハわろし

巳未のとしの人ハるあきのうまれハよしなつふゆの生れ

ハわろし卯酉のとしの人ハるあきのうまれハよしなつ

ふゆのうまれハわろし寅亥のとしの人ハるあきよしなつ

ふゆわろし

う三 有卦無卦十二運の事

うけむけの事ハ則此十二運にて知るべし十二運上の七年ハ

うけなり下の五年はむけなり

胎養長宦【よろづ／よし】衰病死【つゝしむ／べし】

帝沐臨

墓絶

世にうけむけの事くはしく知たる人少なし有卦に

いりたる年ハ胎の運なり次の運ハ養の運也三年めハ長

の運也余ハ準じて知べし

○うけに入日ハたとへハ木性の人酉のとしうけに入酉の

とし酉の月酉の日酉の刻にいるなり辰のとしよりむけに入

辰の月辰の日辰の刻よりいるとしるべし○毎年正月ハ

寅二月ハ卯三月ハ辰の月也余ハこれに準ず

木性【とり】のとしより七年／があひだうけにいる【木性【た

つ】のとしより五年／のあひだむけ也【

火性【ね】のとしより七年／があひだうけにいる【火性【ひ

つじ】のとしより五年／のあひだむけ也【

土性【むま】のとしより七年／があひだうけにいる【土性【う

しのとしより五年／のあひだむけ也【

金性【う】のとしより七年／があひだうけにいる【金性【い

ぬ】のとしより五年／のあひだむけ也【

水性【むま】のとしより七年／があひだうけにいる【水性【う

しのとしより五年／のあひだむけ也【

▲うけにいろとしを知る方

木ハとりよ金の鼠に火のうさぎ土水なれば午としるべし

註

伊藤孝行（二〇一七）翻刻『万代大維書古今大成』（七）、「メディア
コミュニケーション研究」70、pp. 右11-12

謝辞

本翻刻をなすにあたり、篠田健一氏に数多御教示いただいた。
ここに記して感謝申しあげる。

（二〇一七年十一月九日提出、十一月九日受理）